

写真左上 / 体表に穴のような潰瘍が形成されたアユ
写真右上 / 冷水病では、下アゴに出血が見られることがある

アユ冷水病対策に光明が 善玉菌で病気を撃退

編集部 レポート
前田昌調 資料提供
山梨水産技術センター 写真提供

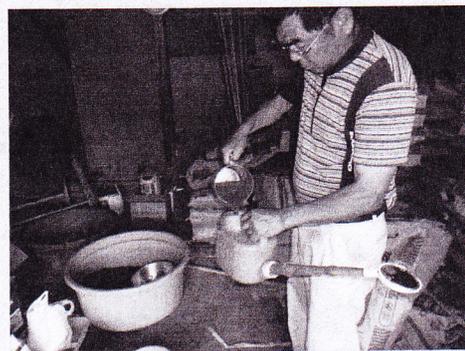
五輪の夏、1匹でも多くの金星を!
アユ釣り 最新動向

につつき冷水病を、いかにして抑えるか。釣り人だけでなく、養魚関係者や漁協にとっても大きな問題である。その難題解決のきっかけになりそうなのが「善玉菌」。菌で菌を抑えるという方法が、今俄然注目を集めているのだ。

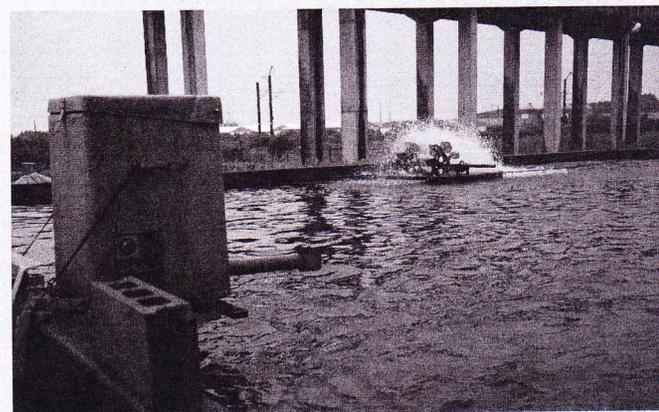
冷水病からアユを救うヒーローの正体は？

冷水病……。アユ釣りのファンにとって、これほど悩ましい病気はない。日々科学が進歩しているにもかかわらず、決定的な対策が取られていないのが現状だった。しかしもしかしらたら、この冷水病の憂いから解放される日が来るかもしれない。そんな希望を抱かせてくれるニュースが、つい先日報道された。まるで人間が普通に利用する健康食品のハナシのように、だがカギとなったのは「善玉菌」である。

その前に冷水病の現状をまとめ



善玉菌を配合飼料に混ぜ、アユに与える



アユの養殖池。左にあるのは投餌機である

ておく。この病気は全国的に発生しており、養殖場においても大きな被害が生じている。魚が死んでしまつのはもちろん、糜爛（びらん）や潰瘍ができるため、数十%以上が商品にならないという。対策方法として抗生物質（スルフィンゾール）の投与が行なわれているが、効果はあまり高くないようだ。また、ワクチンも実用化されていない。加温処理による治療は一時的な効果しか生まず、再発の可能性があるという。

冷水病は天然アユにも発症し、全国のアユ資源量は1万7000トン（1990年）から6000トン（2005年）にまで減少。2010年には3400トンになっている。

釣り人のみならず多くの関係者が頭を痛める冷水病だが、今回宮崎大学の名譽教授・前田昌調氏が発表したのは、シユウドモナス菌MS-1株新種による対策である。シユウドモナス菌は自然界に多いという。そしてこの菌が、冷水病菌（フラボバクテリウム・サイクロフィラム）の増殖を強く抑制することが分かったのである。

その効果を実証したのが、高崎県日向市にあるアユ養殖場『あゆの是則』。ここでは毎年、稚魚の出荷をふくめて500万尾以上のアユを生産・販売しており、全国五指にはいる生産量だという。これまで毎年冷水病が発生していたのだが、昨年12月より善玉菌の投与を開始し、月2回の給与により冷水病の発生が抑えられたそうだ。

また、『あゆの是則』から稚魚を購入した養殖場においても、冷水病は発生しなかったという。

アユはワタまで食す人が多く、頭から骨ごと食べることも少なくない。となると、薬ではなく自然界に普通に存在する善玉菌による冷水病対策のほうが、私たちにとっても安心できる。それにしても、菌で菌を抑えるとは……。やはり科学は、日々進歩しているのである。